

「岩永京吉展～心の表現～」 ギャラリートーク

平成 29 年 8 月 19 日 (日)

場所：エイブルホール

講師：岩永京吉美術館

館長 石川宗晴氏



私は、生まれは山口県で、大学は物理をやりまして、その後、九大で少し助手をしましたがけれども、その後企業に入り、研究開発ということで、ものづくりの方をやったんですね。その頃結婚して、京吉さんに会っても、絵は京吉さんの仕事なもんで、アトリエに入るのもおこがましいような感じですね。戦いの場に変な者が入ってくると、戦いが戦いでなくなるみたいな気がして、入ることはなかったんですけども、日展

の制作が終わって、出品するときの梱包のお手伝いをするのが唯一寄与したかなあと、それも時々だったものですから、ほとんど寄与していない状態だったんですけども。

亡くなってから、「残った絵をどうしようか」ということで、おばあちゃんたちとちらほら資料を見始めたんですけども。

最初に見つけたのは、昭和 48 年からまとめて書き始めた制作日誌だったんですね。そ

の制作日誌の中に、「絵は精神だ」「一つのタッチにこもる心」

「気韻生動」という言葉を書いているんですね。制作日誌だ

から、どうしたこうした、構図がどうのこうのから始まるの

かなと思っていたら、最初の日誌の書き始めは心構えだった

んですね。言葉がいっぱい書いてあるんですよ。もう日展に

も出して、この辺りでは有名にもなっているのだと思うん

ですけども、この人がやっぱり、自分を確立するのにもものす

ごく苦勞をして、自分を鼓舞してやってきたんだなあというのが、これを読んで分かりま

した。日本画の精神というのは、中国の流れもあるのですが、やっぱり心、絵の中に

気がうごめくような、そういうふうなものが伝わるような絵をいかに描くかという、そ

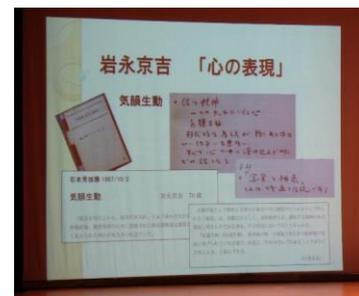
ういう心の問題でもあるんだなあと思ったんです。石本先生の展覧会の時にもこの「気韻

生動」という言葉を贈っているんですけども、やっぱり洋画であろうが、日本画であらう

が、本当に心を打つというか、人に伝えようとする何かがあるときには、やっぱり「気韻

生動」という、そういうことなんだろうかと、そういうふうになんて書いて、「それは学ぶ

べきことではなくて天性による」と書いてあるので、やっぱり凡人には無理なのか、それと



も努力すれば天性を得られるのかというふうにも思ったんですけれども。

資料を整理してみると、小学校の頃から絵が好きだったことがわかりました。16歳で絵を志して、それから死ぬまで80何年絵を描き続けて、これはなかなか出来ないと思うんですね。私は会社があつての研究職なので、会社を辞めちゃうとそれでおしまいです。研究も何もなくなってしまって、専門がないので、なくなっちゃうわけなんですけれども。絵というのは、自分に付随しているものだから、いくらでもというか、いつまでも続けられるというのがいいなあと思います。でも続けられる可能性はあつても、それを続けることは難しいんだろうなあと思っております。やっぱりそこに、京吉さんの作品をまとめようと私が思った動機があつたんですね。どういうふうに悩んで、それを何で続けられたのか、何を求めたのか。また日展制作を終わって80歳から精力的に絵を描いてきたんですけれども、その原動力は何だろうなあと思ってみると、やっぱり絵を常に研究しているんですね。新しい手法、新しい色、新しい構図、ここに込める新しい気持ちを常に生産し続けていた。だからこそ、いつまでも描けたんですね。失敗しても、次回は違うというようなこともあつたのだと思いますが、そういう姿を見ると僕は研究せざるを得ないというか、考古学みたいに、新しい絵や文章が出てくる度に整理して、なんでなんだろうと考えて、きつこうなんだろうと勝手に理屈をつけていって纏め上げたのが、(床の間コーナーにある)資料なんですね。だから、研究し続けていて、飽きないんです。自分もそんな人生を終えたいなあと思うんですけれども、そうはいかないだろうなあと思います。

京吉さんは80歳くらいで孫にパソコンを習って、そのパソコンで自分の文章をまとめるようになります。

84歳の時の文章に、「絵を志した3つの動機」について書かれたものがありました。

1番目は、小学一年の時に描いた檜の梢の絵、2番目は、乙丸の実家の屋根瓦にまたがって描いた北山の絵、3番目は、美術学校の受験に失敗し浪人しているときに、受験勉強のためについた小泉勝爾先生に見せてもらった薔薇の絵。これが自分の動機付けになつたと書いています。こういうのがあるから、どういうふうに自分を作つて来たのかというのがわかつて、私にとっては面白いものです。

最初の、「檜の絵」というのは、上から3センチくらいしか仕上がっていないのに、途中で終わって、ちょうど白紙答案を出す時のように、回収されてしまったという残念さがあると。ものすごくうまく檜のてっぺんから葉っぱの塊まで描けたのに、白紙答案で取り上げられてしまって、しかも、この続きは後でねと言われていたにもかかわらず、2回目はなかったというふうにして書いていまして、きっとゴミの焼却場で、庭の落ち葉と共に焼かれてしまったんだろうなあ。そこまで自分の書いた答案というか、作品に対して愛着があるということは、なかなか……。でも、こういうふうにして心に刻んでいっているということなんでしょうかね。

2番目の北山は、乙丸の北側に実際に見える山です。のっぺりとして何の変哲もない、なまこが横たわっているような山と書いていますけれども、それでも色が、良い色がでた

と、こげ茶色でも複雑に入り混じって、もちろん緑一色の絵ではあるけれども、深みのある良い色が出たと。自然の中から色を発見して、それを絵という格好で固定するということなんでしょうかね。描くことで、新しい色が出たということが、絵を描くという原動力になっているのかなあとと思います。自分的には、色を発見する、自然の中から色を見出してくるという作業は、とてもできないですね。だけど、京吉さんの絵を見ていると、ああそうだよ、こうだよ、というふうになっていくというところが、天性というのか、違いがあるところだと思ってしまいますね。

一昨年に倉庫を整理していたら、倉庫の一番奥のところに、木の行李があって、その中に入っていたんですね。家を建てたのが昭和33年なので、その前の頃のものが全部そこに押し込められて入っていたんだと思うんです。家の中はたいがい探して、絵とか資料とかひっくり返してみたんですけど、もう少し隠し倉庫かなんかあって、新しいものが見つかるんじゃないかなと思って、倉庫を見てみたら、本当に出てきたんですね。戦争に行つて、戦争から帰ってきて、絵を描けるように立ち直るまでのプロセスがわかるような資料がたくさん出てきたので、また楽しく整理をさせてもらっています。

3番目の「薔薇の絵」ですが、京吉さんは、昭和9年11月に上京して、2月か3月の受験まで勉強するというので、小泉勝爾先生につきました。その思い出の中で、サンプルとして見せてもらった薔薇の絵が良かった、と書いています。花の紅い色も勿論美しかったけれども、その葉の色の真に迫った美しさに本当に圧倒された、と。やっぱり指導というのは、本物を見せるというか、本当に力を込めて描かれたものを見せることで感動が伝わるのだなあと思いました。

美術学校に入ってから、いろんな指導をされたようです。「絶好のチャンス」という文字をデザイン的に描きなさいという宿題、少し簡略化してもいいけど、きちんと上下反対になっている菖蒲の花を描きなさいという宿題が出たようです。ステンドグラスのようなものもあります。中山競馬、いついつ開催というようなものもデザインしています。1年生の10月には、鳥獣人物戯画3部の模写をしています。

これは床の間に置いてあったんですけども、17歳で描いて、それから40年くらい経ってきちんと装丁をしてもらい、巻物にしているんですね。最初の頃は、何枚か、1メートルくらいの半紙が積み重なって置いただけなんでしょうけど、よく残っていたなあと。途中一部繋がらないところもあるようなのですが、全部描いているみたいです。どうやって描いたのかなあとと思いますね。これは、鎌倉時代のものです。



もう一つ、平安の後期から鎌倉の後期にかけての騎馬武者ですかね。後嵯峨上皇の護身の騎馬の絵があります。

また、牛の猛牛図というのもあります。それも模写しています。これは掛け軸になっていたのですが、私が普通の額縁に入れようと思って、剥ぎ取ろうとして頑張ったのですが、

ちょっと切れ切れになってしまって、私の裏打ちの練習にさせてもらいました。大変貴重なものを練習に使ってしまって、本当にごめんなさいと言うしかないのですが、そういうのも描いていますね。

終り頃には、古美術を勉強しようと、修学旅行という形で、東京から大阪、近畿辺りの古刹を回っています。昭和 12 年の近畿地方の古美術についての冊子があります。

また、納富先生の東京の下宿にも遊びに行っ、今日は豆腐があるから豆腐を食っていけやみたいなことでお世話になっていたようです。鹿島に帰ってくるのも一緒だったようで、納富先生は藤田嗣治張りのオカッパに、ロイドめがねのいでたちで、下関で特高警察に肩をたたかれたこともあった、と書いているので、時代の雰囲気はすごくよくわかって、人となりというか、納富先生との関係もよくわかるのかなと思います。

京吉さんは昭和 13 年に卒業し、長野県飯山に嘱託の教員として赴任します。生来、誠実なのか、そこでも制作日誌を書いているので、残っているのは飯山の第 4 編という制作日誌です。4 編があるから 1、2 編もあったと思うのですが、それは残っていません。

この第 4 編の中に、12 月 8 日の真珠湾攻撃のニュースに対する感想も書いているのですが、たぶん戦争に行くのでこれでおしまいだと思ったようですね。帰ってきたらこの日誌がきちんと残っていたということで、「戦火繚乱に揉まれて木端微塵になって了ったあとは、この日記が飯山・伊那の生命の記録としてどこかに残るんだろうと思っていたが、四年半の月日を枯れ枯れの界に漂ひ、舞い戻って来てみれば前世のきろくとして懐かしい。ここに秘められた疑問がすべて解決されて了ったんだけど。あゝ又果てしなく疑問は續くか!」と書いています。

飯山の中学校からすぐ山の方に行くと、奈良澤の林という所があつて、そこに籠りつきりというか、仕事が終わって食事をして夜出て行くとか、食事も摂らずに出て行って、帰ってきてからご飯を食べるとかいうふうなことで、林の中で、生命の息吹をもらうみたいなことを日記に書いているので、やっぱり絵に向かう気持ちをここでもらっていたのかなと。一方では、臨時召集等もあつて、なかなか集中できないということもあるし、授業もあつて大変だったと思いますけど、奈良澤の林に来て、心を落ち着かせていたのかと思います。

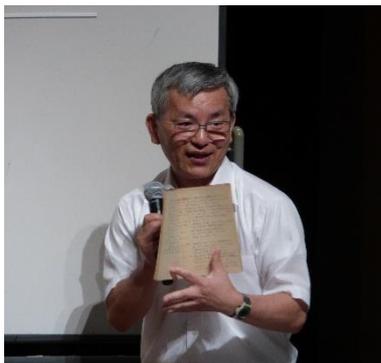


戦争が終わって、昆明ですかね、ベトナムと中国の境目辺りに拠点があつたらしくて、そこで捕らえられていて、昆明から揚子江の港町まで 1800 キロくらいあるんですが。ちょうど、青森から長崎までが 1700 キロ弱くらいで、その距離をトラックで、50 日くらいかかって連れて行かれたという資料が残っています。道すがら、司令官か何かから俺の自画像を描けと言われたとかで、70 枚くらい、帰ってくる途中の絵を描いています。それとは別に兵隊さんの絵も出てきて、こういう格好をしていたのかなあとと思いますが。これがスタート地点、こういうトラックに乗せられて帰ってきたんだと思います。途中で洗濯したり、山越えし

たり、現地のおばちゃんの生活を描写したりしながら、帰ってきたんだと思います。

鹿島に帰ってくると、制作日誌をつけて、芸術へ芸術へと、自分を押し向けて、気持ちを整理していったんだと思うのですが、なかなかすぐには絵も描けなかったようです。文章という形で自分の気持ちを表現することで、心の整理をしていったように見えるんですね。戦争に行っていたので、先生になるためには、公職適格判定書というのをもらわないといけない時代です。それで佐賀県からのをもらって、先生になりました。

先生になったらなつたで、今度は教えるということなんですけど、教科書があったのかどうかもよくわからないのですが、「工芸大観」という、手書きのノートがあります。講義



ノートなのかなあとと思いますが、図書館の本から整理して工芸という形で、生活の基盤になるような調度品とか食器とか、金物細工とか漆器とか、そういったものの知識を教えようと思ってまとめたのかなあとと思いますが、こういう形で授業をしながら、やっていたんですね。

昭和 24 年頃からは展覧会に出品するようになります。

「美校を卒業して自分の仕事をまとめる閑も無く戦争に駆り出され、終戦まで若い身空を他所に捨ててしまった。ややこしい日本画の『絵の具』の扱い方は勿論、『絵を描く事の意味』も何も忘れてしまっていた。今思うと可笑しいようだけれども、本当にどうして好いか分からなかった。」と、後で昔のことを懐古して書いています。佐賀美協の「心のふるさと」に寄せているのですが、帰ってきて、佐賀美術協会があって、そこに出すところがあるというか、みんなそういうところを出して、自分を表現しているということが、自分の動機付けになって、それで立ち直ることが出来たみたい書いています。また、近代美術名作展ということで、佐賀の玉屋百貨店で文部省所蔵の美術品を展覧しているようなこともありましたので、そういうリハビリをしてきた時期だったのかなあとと思います。

昭和 31 年には、涅槃像を描いているんですね。これも資料の中にあって初めて分かったのですが、涅槃像を描いているなんて聞いたことなく、おばあちゃんに聞いても、「描きよったかねえ？どこで描きよったろうか？」という状況で、60 年ぶりに見せてもらったんですけれど、表具することになってですね。小笠原表具店の人が、ちょっと岩永先生のところに見せに行って良かろうかということになって、これは中尾の興善院さんのところにあるんですね。今は裏打ちされて、きれいになっていて、今年の 2 月にお披露目があります。

人物の顔などをそれぞれ見ると、何処のをまねて描いたのだろうかと思うもので、色々探したのですが、似たようなものとか、動物のこういう配置とか、なかなか同じものは見いだせずに、色々探して描いたのだろうかあとと思います。

昭和 33 年に家が出来上がって、ここからは皆さんが良くご存知の京吉だと思のですが、
れど。

昭和 41 年に日春展が立ち上がって、その初回に、「老農」という作品で入選したんです
ね。モデルは義理の兄さんの奥さんのお父さん。一人で
いろいろな石垣等を築いて田んぼを整備したということ
で、その姿がそのまま逞しく残っています。



日展出品の作品は毎年、夏休みに、一生懸命汗をかい
て作業をしていたようで、85歳の時に振り返って、「2
メートルに余るパネルをアトリエ一杯に倒して、パンツ
一枚で踏み板の上にしゃがみこみ、筆を運ぶ」と懐かし
く語っています。「毎年、毎年、よく頑張ったなあ」と。

毎年、毎年。

今まで、日展に出たのが、「働く人物」「牡蠣打ち」。「牡蠣打ち」が一番皆さんには知っ
ていただいていると思いますが、家族もいくつか描いていますね。日春展も同じですね。
奨励賞もいただいています。

そしてパソコンを習って、文章を書き始めます。それを読むと、初めて京吉さんの心の中
がわかって、今回の「心の表現」というのは、そこからの印象でまとめさせていただきました。「85歳になっても、縮こまってはいけない。この機会を大事にして自分を総決算し、
85年の生涯の中から自分らしいものを取り出し、らしくないものを捨て去っていこう。写
実から何処へ」というようなことを書いているので、私はまだまだですね、こうありたい
ものだなあ、ここまで元気でいられたらなあと思うのですけれど……。自分の絵というも
のを探し続けているんですね。

日展に出品しなくなったら、自由に四季の変化を感じて絵を描いて、旅行に行って
旅行記を書いて、というのがありますね。描いた絵に旅行記というか、自分のコメント、
気持ちを書いているので、その時の感じがわかって助かります。

普賢岳の噴火の絵もあるのですが、普賢岳が噴火す
ることによって、麓で何人も人が亡くなっているとい
うことで、そういうのを絵の対象としていいのだろうか
と悩んでいたみたいなんですけれど、這い上がって、立ち直
っておられるので、こういうこともあったんだよという一
つの作品を残すことの意味もあると思って、あえて挑戦し
て描いたと書いています。それぞれ描くにも覚悟があるとい
う感じです。





これは菊池溪谷ですね。風光明媚なところという感じがあるので、そういうところは描きたくないということだったのだけれど、たまたま私の息子である孫と一緒に旅行した帰りに、ちょっと寄ってみようかということになって、車を降りたら、もう自然とスケッチを始めていたと書いています。それほど引き込まれるものがあった、この風景画が生まれています。

スケッチ旅行は、こちらが良いと思って連れて行くんですけど、そこは素通りして、ここはいいだろうとずっと素通りすると、あちよつと待って、と言って引き返すことがありました。この山も吹きさらしで、高森峠の下から風が上がってくるので、寒いんですよ。背中に新聞紙を入れて、寒くないように防寒対策をして、上から見て描いたということです。構図がすごく気に入ったのでしょうか。

「由布」を描くときには、勇んでいったのですが、着いたら、絵の具の道具一切がなかった。「大変！取りに帰る」と言ったのですが、由布院の町の中で文具屋さんを探し当てて、小学生が使うような絵の具を買った。本人としては、「この絵の具で？」という気持ちだったと思うのですが、出来上がると、「すごく良かった」と言っていました。スケッチはすごくデフォルメされているのですが、描くものがあったというか、迫って描けたところ良かったみたいです。

こちらは大野原の演習場なんですね。何にもない、ただ轍がちょうどあった。演習場だから草もきれいに刈り取られているのですが、たまたま水溜りがあって、「なし、そがんとをかくねー」とおばあちゃんは言っていました、出来上がってみると、なんか心を写すような作品になっていて、わからないねーという感じがします。



一時期、熊野磨崖仏とか仏像に凝った時期があって、やっぱり心の整理の一つなのかなあとと思いますが、仏像にあたる光が希望のような感じがして、この黄色っぽい見えるのが光の反射で、岩陰にあるのが緩やかに光に当たっているとすごく気に入ったと書いていますね。

また、国東半島の山を描いたときは、墨絵で表現したような形のリズムを、日本画の中に墨絵のタッチを生かす、そういう気持ちで作り上げたように書いています。



これが最後の作品ですが、ここの銀箔を貼っている途中に、脳出血で倒れて、1年半の闘病でした。途中、スケッチが出来るくらいに元気になっていたのですが、94歳でした。

ということで、たぶん皆さんがご存じない前半の部分と、後半のまだまだ頑張れるという部分、そういうところを見ていただいて、京吉頑張ったというところで、お話を終わらせていただきます。ありがとうございます。

いました。